

英語表現にみられる日本語的発想の影響

——読み書きの見直し——

Influence of Japanese Way of Thinking upon Students' English Usage

付岡 京子*

Kyoko Tsukeoka

序

近年語学教育に於いて、聴く事、話す事への関心がとみに高まっていて、その事自体は結構な事ではあるが、その反動として、読む事、書く事がなおざりにされる傾向がある様に思われる。その上、文法無用論を耳にしたりして、ますます学生の関心は日常会話中心になっていく様である。日常会話だけに限れば、確かに「習うより慣れろ」という事があてはまるかもしれない。たとい文法的には正しい文でなくとも、いいまわしが多少おかしくとも、慣れてくると間違いにも法則性がみえてきて、何となく相手のいっている事がわかる様になってしまう。一例を挙げれば、日本人の英語が、英語を母国語とする人の中で、日本人とよく接している人には通じて、余り日本人と接触する機会をもたない人には通じないといった事がままある。妹が日本人のオフィスで働いているというアメリカ人から、かつて直接きいた話であるが、妹はオフィスの日本人のしゃべる英語を理解できるが、自分にはさっぱりわからないといっていた。

しかし慣れる為には、それにふさわしい言語環境、即ちその言語を浴びる様に聞ける言語環

境が必要である。特に日本の様に、地理的に他の国々と隔っていて、日常的に外国語を使う場に恵まれていない場合は、日常の場での自己修正に期待する事は難しい。言語環境が整っていない所で、自然に覚えていこうとしても無理な事という迄もなく、何らかの意識的な学習が必要と思われる。挨拶程度の会話に終始するのであれば、大雑把な丸暗記でも事足りるかもしれないが、もう一步踏み込んだ会話となると、正確さと論理的な思考力が要求される。会話は相手があってはじめて成り立つものであるのに対し、そもそも丸暗記は一方通行である。覚えた事を唯吐き出すのでは、本当の意味での会話にはならない。相手のいう事が理解できて、それに対して適切な応答ができてはじめて、真の意味での会話が成り立つ。感覚的な好き嫌いの域を出ない会話を想定して、会話を勉強したいといっている学生が、かなり多い様に思われるが、滑らかさというのは学習の完成された形である事を考えれば、臨機応変に適切な受け答えができ、思っている事を過不足なく英語で表現できる様になる為には、かなり確かな総合的な英語力が必要である。

最近の学生は、書く事を毛嫌いして、会話に奔りがちであるが、音声は消えてしまうのに対

*英語専攻

し、書かれたものは見直すという事ができるので、推敲の過程で曖昧な知識も確認、強化でき、文法という規則に当てはめてみる事で、自己修正の機会が与えられ、論理的な思考の訓練の場が与えられる。本学で英語音声学の時間に、テープで聴いた文章を反復復唱する様に学生に求めると、すぐ反射的に音声で反復せずに、書き留めようとする学生がかなりいる。あっという間に消えてしまう音声刺戟では心もとなく、書き留める事によって得た視覚的手掛りを頼りに、復唱すべき内容を確認しようとしているためと思われる。見直すという事は又、句や文単位の発想でなく、全体の構成に照らして見る機会をも提供する。書く事を通して得るものは多い。英語は語い構文のみならず、発想も日本語とは異なる。日本語をそのまま忠実に英語におき換えても通じない事がよくある。本稿では、主に日本語的発想との関連から、学生の英作文を点検する事を通して、総合的な英語力に通じる英語表現指導に有効な方法を模索したい。

1. 書き言葉と話し言葉

学生の英作文、特に自由作文を添削して最近よく目につくのは、話し言葉をそのままそっくり書き言葉として使っているものがみられるという事である。この様な学生は、多分会話ではかなり通じていて、それ程不自由は感じていないものと思われる。しかし書かれたもののみ読むと、断片的な、時には文にさえなっていない、ほとんど意味の通じない文もあって、まるで判じ物をしている様な感じで、想像力をたくましくしないと判読できない場合が多い。確かに最近、書き言葉としても口語表現が好まれるようになってきている。しかし平易な口語的な文体で書くという事、即ちブロークンでいいという事にはならない。昭和63年度入学の本学英語表現Ⅱ bに登録している学生を対象に、学年の始めに書かせた自己紹介(Myself)、及び夏休み直前に課した夏休みの計画についての

自由作文(My Summer Plan)の中から、その典型的な例をいくつか拾ってみる。尚、My Summer Planに関しては、誤りを含めて再考を要する部分に下線又は訂正記号のみを入れ、訂正はせずに原文のままコピーして、次の授業の時に各学生に返却し、自己修正させると同時に、書いた学生が何を云わんとしていたのかを正確に知る為に、自分の作文の日本語訳をさせ、訂正済みの英作文と共に提出させた。Myselfに関しては、同様に自己修正したものを再提出させ、日本語訳はさせずに、意味不明のものについてのみ個別に面接をして、云わんとするところを確認した。

次の例は、夏休みの計画について書かれたものの一例である。

August, I'm going to travel, Niigata and Nasu. Niigata, I'll stay my friend's house. And I want to go Sado-island. And Nasu Heights, I'll go to with my family and relatives. (例1)

話し言葉をそのまま書き言葉に移しかえた様な典型的なブロークンの英語である。文法的にはあちこち前置詞がぬけていたり、語順が前後していたりして、整っていないが、会話として聴けば、意味は何とか通じるであろう。しかし書き言葉として、内容をよりきちんと伝える為には、更に副詞を補ったり、動詞の選択、句読点の使い方にも慎重を期す事が望ましい。このあたりを自己修正の時に、自ら気付いてほしいのだが、その為には、単に綴字や文法上の訂正にとどまらず、内容に迄ふみこんで、パラグラフの構成を念頭に、全体を見直す習慣が必要である。この事に関しては、後にもう少し詳しく検討する事にして、ここでは次の例をみてみたい。

I'll drive a my car with my family at a hot spring. And I'll go to the sea by a few friends. (例2)

これは、冠詞や前置詞の誤用の為、意味がとりにくくなってしまった例である。最初の文は、「家族と一緒に車で温泉に行く」という意味で書いているのだが、一瞬何をいっているのか、頭をひねってしまった。次の文も書かれたもののみ見ると、意味がわからない。しかし話し言葉として聴けば、多分、「数人の友達と海に行く」という意味にとれるのではないかと思う。この他にも、前置詞や冠詞の省略、誤用の例は、I stayed at home several days afterwards. や I always get up nine o'clock every morning. 又 It was very hard job. 等、枚挙にいとまがない。前置詞は関係を示す上で重要な働きをするので、例2でみた様に、前置詞の誤用は意味をとる上で大きな障害となる場合がある。それにもかかわらず、話し言葉としては余り問題にならずにすむのは、何故であろうか。

音声言語としての英語は、強勢を軸とした言語なので、原則として強勢と弱強勢が交互に出てこようとする傾向がある⁽¹⁾。聴覚的に印象に残るのは、文強勢のおかれる所であって、弱強勢の所は、もともと聞えるか聞えないかわからない程度に発音されるのが普通である。前置詞や冠詞の様な機能語は、特別な場合を除き、通常弱く発音されるので、たとい間違っている、間違いが余り際立たずにすむ。聴き手は常に聞えにくい所を前後関係から補って聴いているので、間違いが問題にならずにすんでしまうものと思われる。

同じ様な傾向は、前置詞や冠詞に限らず、次の様な場合にも認められる。

1. Because we are twin.
2. My hobby are listening to music and shopping.
3. I sometimes driving with my friends.
4. I'm going to busy getting a job this summer.
5. I'm feel so good and very happy.

6. I'm talk about my character and hobbies. (例3)

これ等は文法的にみると、名詞の複数語尾が落ちてしまっていたり(例3-1)、be動詞の使い方には不備が認められるものである。即ち、be動詞が主語と呼応していない(例3-2)、be動詞なしに、いきなり分詞や形容詞をもってくる(例3-3, 4)、be動詞を普通動詞と一緒に使ってしまう(例3-5, 6)等、学生がしばしば犯す誤りである。書き言葉としては目につく間違いであるが、話し言葉の場合、動詞でも、特に短縮形が使われていると、聴覚的には余り目立たないですんでしまう。As hunting for a job had seen many people and studied, it was good. 等も書き言葉としては、文の型をなさない全くのブローケンだが、話し言葉として聴いた場合は、代名詞は通常弱強勢なので、聴き手の方でhad seenの前にIを補って聴くと、結構意味が通じてしまう可能性がある。

書き言葉では極めて目立つものの、話し言葉ではわからない間違いの典型的なものは、綴字や句読点の間違いであろう。書かれたものの場合、綴字に間違いがあると、極めて印象が悪いだけでなく、中には同音異語もあるので、意味が全くわからなくなってしまう事も多い。最近の学生は、聴く機会、話す機会には比較的恵まれているので、うろ覚えに聴いたものを、品詞や用法、綴字を確かめる事なく、なんとなくそのまま書いてしまう。中には綴字等はローマ字式に書いてしまう者さえいる。次の例は、綴字の誤りが多い典型的なブローケンの英語である。

Tochigi is famous for place tourist risort.
For example, many sider of Nikko, hot
springs in Kinugawa. (例4)

筆者自身は日本人なので、日光という土地柄から、siderは多分cedarsの事であり、risortは

resorts の間違いであろうとの察しはつく。しかし日光を知らない人がこの文を読んだら、何が多いのか分らないであろう。一方、もし *sider* [saidər] を [si:dər] と発音していたとしたら、会話では逆に通じてしまう可能性がある。大文字、小文字の使い分けも、話し言葉では問題にならないのはいう迄もないが、書き言葉の場合は、文章のはじめが大文字になっていないと、基本が分っていないのではないかと疑われてしまう。日常会話では、文章の形をとらずに、断片的な単語や句だけで受け答えがなされ、結構なめらかな会話が流れている事が多い。これを書いた学生も、多分そういう感覚で、For example で始まる文を書いたのであろうが、大文字で始まり、終わりに period もうってあって、形の上では独立した文の様にみえるが、中身は動詞がなく、句の羅列に終わっているので、書き言葉としては不備な文という事になる。

ところで、話し言葉の場合はブローケンでも結構通じるのに、書き言葉となると、意味する所が伝わりにくいのは何故なのであろうか。この点に関して、もう少し考えてみたい。まず、話し言葉の場合には、狭義の「言語」以外の要素が、意志伝達において果す役割が大きいという事があげられよう。表情、身振り、手振り、動作、抑揚、声の調子等、所謂「沈黙の言語」が、コミュニケーションにおいて大きな役割を果たしている事は、最近ではよく知られる様になってきている。心理学者の Albert Mehrabian によれば、コミュニケーションにおいて、verbal (狭義の「言語」) の占める割合は僅か7%で、38%が vocal (声の調子)、残りの55%が facial (表情、身振り等) を通して理解されるという⁽²⁾。

日本にも、「目は口ほどにものを言い」という諺があるが、同じ言葉を云うのにも、にっこり笑いながら云うのと、突っけんどんに云うのとでは、聴き手の受け止め方がまるで違ってしまふばかりでなく、話し手の意味する所も微妙

に違って来る。更に時には、実際には思っていない事を口にしてしている事すらある。聴き手も、表情を注意深く観察する事により、本心かどうかを確かめたりする。この様に、ちょっと考えただけでも、狭義の「言語」以外の手掛りが、如何に日常会話の理解に大きくかかわっているかが分る。

こういった視覚的な手掛りの他にも、話し言葉の場合には、豊かな感情表現を可能にする抑揚、声色、声の調子、間といった貴重な音声上の手掛りが存在する。例えば、語順は平叙文でも、抑揚を上昇調にして終えれば軽い疑問文になる。この時には書いた場合でも疑問符をつけるので、疑問文と判別できるのだが、会話においては、語順よりも声の調子、抑揚といったものが優先する事を示す一つの例といえよう。書いた場合には全く同じ言葉が、話し言葉になると、抑揚、声色等を変える事によって、それにいろいろの意味を付加する事ができる。抑揚一つとっても、平叙文は下降調で終わる事が多いが、ちょっとあげ気味に終わると、まだ続いている感じを与える事ができるので、意味に深みが加わる。付加疑問文も、上昇調にすれば、「不確かなので、きいてみる」というニュアンスだし、下降調にすれば、「わかってはいるが、念の為きいてみる」というニュアンスになる。この狭義の「言語」以外の要素を存分に使うと、唯名前を呼びあうだけで、3分間の劇の構成が可能だとさえいわれている。又、もしこういう事がなければ、誰が演じても同じで、上手な役者も大根役者も変わらないという事になってしまう。一方、書き言葉には、こういったニュアンスの相違を生み出すコミュニケーションの諸要素が剝奪されているので、必要な場合には、言葉を使った説明に頼らざるを得ない。

書き言葉と話し言葉のもう一つの差異は、話し言葉の場合には、意味が不明であれば、すぐその場で質問をして、確かめる事ができるという点であろう。更に時には聴き手の方で、不十分な点を補足して、正しい文にして応答してく

れたりする。つまり自然の会話の中で、自己修正、補足の機会が与えられているわけである。これに対して書かれた言葉の場合は、読者はその場で著者にいちいち質問をして、確かめる事はできない。それだけに書き手は、不特定多数の読み手にもわかる様に、きちんとルールにのっとって書かねばならない。仲間うちだけに分かる言葉づかいや、略語は避けなければならないし、思い込みや自分勝手な解釈で語句を用いていないか、常に自問する必要がある。その上書き言葉の場合は、先にふれた所謂「沈黙の言語」、即ち、表情、身振り、手振り、動作、更には抑揚、声色、声の調子等の助けを借りる事ができないので、話し言葉をそのまま書き言葉に置き換えると、通じなくなってしまうと、不思議はない。

以上みてきた様に、書き言葉は、コミュニケーションの他の要素を剝奪され、狭義の「言語」のみという厳しい条件のもとにおかれているので、読み手にわかってもらう為には、話し言葉では許される曖昧さも、書き言葉では極力排除しなければならない。その為には言葉をいい加減に、うろ覚えのまま使わないという事が必要で、綴字はもちろんの事、品詞、用法もきちんと確認して使うという事が求められる。せっかく文字という見直す事ができる手掛りが残されているのであるから、他人の目にふれる前に、必ず推敲という手順をふんで、自ら点検してほしい。この推敲の機会を人為的に作るという目的で、訂正記号のみ付して返却し、自己修正をさせるという過程を、英語表現の授業に取り入れてみた。実際自己修正の段階で、自らかなりいい英文に手直しできた学生もいる。一方、下線を引かれても、どこが悪いのか、さっぱり分らない様な学生がいる事も事実であるが、そういう学生には、個別に面接による指導を行い、できるだけ自分で間違いに気づき、自ら訂正する様にしむけている。現に面接の折、ちょっとヒントを与えると、あっと気付く学生も多い。すでに訂正されたものを直接返される

と、学生はどうしても受身な態度になってしまい、訂正箇所を確認するといった過程がおろそかになりがちである。これに対し自己修正の場合は、学生が自ら考え、積極的に取り組む事を余儀なくされる。推敲の機会があるという事は、指導上、書き言葉の大きな利点の一つといえよう。書く事に関して、その過程に関心が向けられる様になって以来、書き直し(revision)に焦点をおいた研究報告がふえてきている事からも⁽³⁾、推敲の重要性を窺い知る事ができよう。

II-1. パラグラフの構成と自己修正

学生に自由作文を書かせると、まず日本語で考えて、それを英語に直すという過程をとったと思われる表現が、かなりみられる。表面上は和文英訳という形をとらなくても、実際には、思考過程において、日本語にひきずられてしまうのであろう。自由作文の場合、まず何がしたいのか、即ち主題を決め、その主題にそって、どの様にパラグラフを構成していくのかを考える。英語で書く場合に不可欠であるこのパラグラフの構成という過程を経ずに、思いつくままに何となく書いていってしまう傾向が、日本人にはかなりみられる⁽⁴⁾。その為に抽象論、一般論に終始してしまう事が多い。思いつくままに何となく、曖昧にぼかして、感覚的に言葉を並べていくのではなく、内容の組立てを論理的にきっちりつめ、筋道をたて、具体的に順序よく明瞭に表現する必要がある。景色の描写一つにしても、思いつくままに唯あちこち描写するのではなく、例えば、近い方から遠い方に向けてという様に、順序だてて描写していく事によって初めて、読み手はその情景を目の前にありありと思い描ける様になる⁽⁵⁾。個々の文章の表現も、常に全体の内容をふまえて、その流れの中で考えていく事が必要である。

自分の書いた文章が、単なる字面の上での転換でなく、伝えたい事を的確に表現しているかどうかを再考する自己修正の段階で、自らどの

程度訂正ができるかという事は、論理的な思考過程であり、パラグラフの概念形成との相関が予測される。即ち、綴字、構文といった表面的な問題の訂正にとどまらず、パラグラフの構成を念頭に入れ、内容に迄ふみこんだ訂正をする為には、論理的な思考が不可欠である。Flower も、their (writers') own intellectual processes are an important part of effective writing⁽⁶⁾。と述べている。

II-2. 関係の確認

英文を書く時には、日本語的発想からの脱却が必要であるとよくいわれるが、日本語的発想に捕われない様にする為には、日本語と英語それぞれの特徴と相違点を、はっきり認識する必要がある。

まず英語は、構文が日本語とは異なる事に留意する必要がある。英語では命令文を除き、原則として主語をたてる。英文を読解する場合も、骨子となる主語と本動詞を見つける事ができれば、文意の基本をおさえる事ができ、大筋で誤る事はまずない。主語と動詞の関係を確認するという手順をふむ事は、書く場合にも基本であり、欠かす事のできない作業である。一方日本語では、主語は必ずしも必要でなく、しばしば省略される。それ故、日本語を忠実にそのまま英語に置き換えようとする、大切な主語がぬけてしまい、何をいおうとしているのか分からない文になってしまう場合がある。

又英語では、仮主語をたてたり、無生物や抽象名詞を主語にたてる事がよくあるが、日本語では主語にしないので、その様な構文の英語をそのまま日本語に直訳すると、日本語としておかしい日本語になってしまう事は、講読の時間等でよく経験する事である。つまり意識しなければならぬ。しかしそういう表現は、英語としてはむしろ、英語らしいこなれた表現であるといえよう。日本語的発想では、主語というとすぐに人を思い浮べるが、英語では可能性がいくつかあるわけで、何を主語に選ぶかによっ

て、使う動詞が変り、書き方も違ってくる。主語と動詞が決まれば、大筋はできあがるので、この過程が非常に重要である。それ故自己修正の時にも、まず主語と動詞が、論理的にきちんと対応しているかどうかを、点検する必要がある。So I'm a part time job. 等も、be 動詞が使われているので、「私＝パートの仕事」となるが、この図式が成立するかどうかを考えれば、その矛盾に気づくはずである。

ところで、日本語の助詞の「は」と「が」は、必ずしも主語を導くとは限らず、従って、そのまま英文の主語にしてしまうと、意味の通じない、おかしい英文ができあがってしまう事がある。具体的にいくつかの例をみてみたい。

- a. This year's holiday was almost go out.
This year's holiday was hunting a job year.
- b. Los Angeles is very hot every day.
- c. spring vacation was made cook cake every day.(spring vacation had been cooking cake once in a while.)
(spent)
- d. My pocket money spend for many records
and concerts so that I become poor. (例5)
(尚、括弧内は自己修正を表わす.)

これ等は皆、日本語の助詞「は」にひきずられて、そのまま英文の主語にたててしまったと思われる文である。尚、例文 a は、課題を与えた時に欠席した学生に対して、補充として夏休みの生活について書かせた作文から取ったものである。例文 a の最初の文を一読した時、筆者ははじめ、「今年の夏休みは、ほとんど終わった。」という意味で書いているのではないかと推測した。しかし学生自身の書いた日本語訳には、「今年の休日は、ほとんど出歩いた。」とあり、次の文に対しては、「今年の休日は、就職活動の年でした。」となっている。しかし英文のみ読んで、その様に解釈する事は無理である。最初の文の動詞は was という事になり、形式上

は go out が補語の役割を果している事になるが、動詞をこの様な形で補語として使う事はおかしいし、そもそも「休日＝出歩く事」という図式は意味をなさない。日本語訳には出ていないが、出歩いたのは省略された主語、即ちこの文を書いた学生自身であるのは明らかである。更に、全く同じ表現の主語を長々とくり返すのは、文体の上で好ましくないので、この二つの文を一つにまとめ、主語と動詞を骨子とする英語的発想の日本語に再構成すると、「私は、この夏休みの間就職活動の為、ほとんど毎日の様に出歩いた」となり、During the vacation I went out almost every day to find a job. とでもすれば、云わんとする所が簡潔に伝わろう。この例からもわかる様に、日本語と英語では、構文、発想、表現方法等異なるので、相互に省略したり、補足したりする必要が生じる。しかし、ここでも骨子となるのは、主語と動詞の関係である。例文 b は、日本語で「ロスアンジェルスでは暑い」の意味で、「ロスアンジェルスは暑い」という言い方をするので、英文でも主語に使ったのであろうが、英語では、気候、天候等をいう時には、it を主語にたてる。又ロスアンジェルスでも一年中暑いわけではなく、行った時にたまたま暑い日が続いたという事であるので、時制を過去にして、In Los Angeles it was hot everyday. とすべきであろう。例文 c に関しては、下線を付して戻したところ、例 5 の括弧内に付記した様に訂正してきたが、自己修正時にも、尚かつ主語と動詞の確認ができておらず、依然として「春休みがケーキを作った」というわけの分らない文章で終わっている。例文 d に関しても、お小遣を使うのは、これを書いた学生自身、即ち I であるはずなのに、使う主体がお小遣になったままで、ここでも主語と動詞の関係がおさえられなかった為に、依然として意味の通じない文で終わっている。もっともこの場合は、動詞を受動態に変えれば、文法的には意味をなすが、英文ではできるだけ能動態を使う方が、より自然で、

生き生きとした文となる⁽⁷⁾。

同じ事が、Many kinds of music is listening. にもいえる。音楽は、文意を考えると、動詞 listen に対して主語ではなく、目的語の関係にあるのに、関係を確かめる事なく、実際には主語が省略されている日本語の語順につられて、そのまま英語に置き換えてしまったのであろう。I hope someday can speak English well. も、日本語では「いつか英語が上手にしゃべれる様になりたいと思う」となって、主語は省略される。しかし英文では、動詞を並列に用いるのでない限り、それぞれの動詞に対応する主語が必要である。ここでも、speak に対応する主語 I を、can の前に再びたてる必要がある。英語は構文上、主語の次にすぐ動詞をもってくるが、日本語では、述語は文末部にくる事が多い。つまり主語と述語との間隔が、比較的離れている事が多いので、この基本的な対応関係を、余り意識せずにすましてしまっている様に思われる。文化庁の出している『言葉に関する問答集』にも、「主語と述語を近づける事が、分かりやすい文を書くための一つの条件になる」との記述がみられる⁽⁸⁾。

更に時には、文の途中で主語が変わってしまう事すらある。そこに主語の省略が重なると、日本語でも、誰がどうしたのか、何がどうなったのか、分りにくくなる。従って、主語の転換は避けた方が無難である事は、いう迄もない。やむを得ず主語を変える場合は、日本語でも主語を省略せず、明記する必要があるとの記述が、先の問答集にもある⁽⁹⁾。実際には主語が変わっているにもかかわらず、新しい主語を省略したまま、逐語訳で英語に置き換えて、意味の通じる英文を期待する事はできない。ここで具体例をみてみたい。It's too hard and too tired. は、「その仕事は大変で、疲れた」という意味であろうが、こんな短い日本文の中で、実際は途中で主語が変わっている。しかし日本語によくある主語の省略で、変わった主語が明記されていない。日本語にひきずられて、そのまま英語に置

き換えたのであろうが、「アルバイトが疲れた」等という、わけの分らない文となってしまっている。

Next day I was cleaning my room. It's tired. の場合は、二つの文にまたがってはいるが、主語を転換する必要がないのに、主語をたて直した為に、逆におかしくなってしまった例である。この学生は更に続けて、Now my room is only myself. と書いているが、これでは部屋が私自身になってしまう。「自分だけのものになった」という意味を表わす為には、myself の前に前置詞 for を補う必要がある。挿入記号を付して返却したが、自己修正時にも、自分の書いた文の矛盾に気がつかなかった様である。

次の例も、実際には途中で主語が変わっているにもかかわらず、新しい主語をたてる事なく、そのまま続けてしまった例である。

(delicious) (is) (difficult)
 Making cakes are interesting and delicious.
 But difficult. (例6)

最初は interesting と delicious の二つの形容詞を、主語が違うにもかかわらず、並列に並べて使っていた為、本来美味しいのはケーキであるはずなのに、「ケーキを作る事が美味しい」等という、わけの分らない文ができあがってしまった。その上、But difficult. と、全くのブロークンの英文が続いていた。しかし自己修正の時に気づいて、自ら訂正している。その際、主語は cakes ではなく、making cakes であると、はっきり認識できた事で、be 動詞の呼応も、are から is へと自分で訂正している。尚更に欲をいえば、interesting と difficult を、順接の and ではなく、逆接の but で結び、順序を逆にすると、論理的にすっきりし、前向きな感じがでる。通常、最後にくる語は強調されるので⁽¹⁰⁾、否定的な difficult より interesting を後にもってくる方が、積極的な姿勢が感じられるからである。又、次の例等も、直し方としては

不十分であるが、自己修正時に、大筋である主語と動詞の対応関係の矛盾に、学生自ら気づいた例である。尚、括弧内は自己修正を表わす。

- a. I took from my house to this college two hours. (It takes me about two hours to get from my house to this college.)
 b. The sea doesn't discuss when and where to go. (We are not decide the day and the place that we should go.) (例7)

例文 a は、はじめ日本語的発想で、主語に人間を想定した文であったが、自己修正時に、仮主語をたてる英語的構文の使用に気づいている。例文 b は、現在完了形にすべき所を受動態を用いているので、厳密に言えば、主語と動詞の対応関係に依然として矛盾が残っているが、原文に比べれば、骨子の部分ができあがっているので、いわんとする所が伝わり易くなっている。尚、目的語は原文を生かした方がよく、わざわざ訂正する必要はない。又

(kind) (to)
 Everyone is very kindness for me.

は品詞を考えずに、単語単位で逐語訳した為に生じた誤りであろうが、最初「すべての人=親切」となっていた。しかしこの学生は、前置詞の誤用を含め、自己修正時に自ら気づいて、きちんと訂正している。ここでも、関係の確認が大きな役割を果たしたものと、推測される。

関係の確認の必要性は、修飾語と被修飾語に関してもいえる。例えば、I have many other places to want to go. は、「他にも行きたい所が沢山ある。」という意味で書かれたものと思われる。主語の省略された日本語の「行きたい所」をそのまま英語に置き換えて、places to want to go としたものと推測されるが、修飾語の部分に want を使うのであれば、対応する主

語が必要である。従って、places I want to go にするか、あるいは、ちょっとニュアンスは変わるが、want を削除して places to go とすれば、構文上の修飾関係は成り立つ。In there, it was cool. も文脈から考えて、特に強調する必要はないので、日本語の語順につられて、そのまま英語に置き換えたものと推測される。副詞 there の位置としては、It was cool there. が自然であろう。尚、there は副詞なので、前置詞の in は不必要である。副詞と名詞を区別せずに、必要な時に前置詞を落したり、逆にこの例文の様に、不必要な時に付け加えたりする学生は多い。前置詞の使い方は難しく、理屈では割り切れない一面もあって、外国語として英語を学ぶ者にとっては、厄介である。多読して語感を養う必要がある。既にみてきた様に、話し言葉では特別な場合を除いて、たとい間違っても余り目立たないが、前置詞は関係を示す役割を果すので、書き言葉では使い方を誤ると、意味が全く通じなくなってしまう事すらある。たかが前置詞一つとおろそかにはできない。

II-3. 省略と補足

ところで英語では、主語と動詞の様に文の骨子となる大事な所を先に出し、枝葉は後にもっていく。一方日本語では、述部が通常文末部にくるので、最後になって初めて否定だという事が分ったりする。この様に英語と日本語では、構文が異なるので、当然語順も違って来るし、表現方法や発想も異なる為、単語単位で考え、忠実に逐語訳すると、文意が伝わらない事がある。それ故、全体的な見地から、いわんとする所を英語的発想の構文に再構成する事が望ましい。その際、日本語にはあった語を削除したり、逆に含まれていない語を補足したりしなければならない事も出てくる。例えば、日本語では、謙遜して「できません」という事がよくあるが、文字通り英語に直してしまうと、全くできない事になってしまう。自己紹介の作文に、I can't speak English. And I can't understand

English. と書いた学生がいるが、現実には英語が全然しゃべれないわけではなく、上手にしゃべれないだけの事である。従って副詞の well を補う事が不可欠で、原文のままでは事実と違ってしまう。二番目の文も、全く理解できない事はある得ないので、ここでも副詞 much を補う事が必要である。更に二つの文を nor で続けられれば、全く同じ書き出しを避ける事ができよう。この二つの文は、構文として文法上の問題はないが、内容的に再考の必要がある例である。順接、逆接の使い分けを誤ると、文と文との論理的なつながりに問題が出てくる事は既にみてきたが、構文的には余り問題にならない副詞や接続詞が、内容の論理的な展開の上では、非常に大切な役割を担っている事が、上の例からもわかる。I have never been active holiday because of I think that I have ever remembered. は、主語と動詞の対応に矛盾がある事に加えて、接続詞の使い方も誤った為、さっぱり意味が通じなくなった例である。語法の上でも、because of の後には節ではなく句がこなければならぬが、そもそも because を使うのであれば、主文と従文を逆にしなければ、意味をなさない。日本語の語順のまま、「～なので」を because にかえ、この位置においたのであろうが、実際には、結果を表わす文に because をつけてしまうという矛盾をおかしている。

英語に限らず、文はできるだけ簡潔であるにこした事はない。特に英語では概念の重複を嫌う。何気なく使っている言葉にも、実は概念が重複しているものがかなりある。例えば、We want to rent a car and rental cycle. 等は、既に rent という動詞を使っているが、再び rental cycle と概念が重複する語を使う必要はなく、bicycles だけで必要充分条件を満たす。次の例は、I have same age sister. Because we are twin. と二つの文に分けて書かれているが、I have a twin sister. だけで充分いわんとする所が書き表わせる。又、After that I'll

spend the rest days slowly. も after that と the rest days を両方使うと重複してしまう. the rest days 自体も「残りの日々」という日本語をそのまま英語に置き換えた逐語訳的表現なので, of を補い, 更に最後の副詞 slowly を leisurely に変えて, I'll spend the rest of the days leisurely. とすると, すっきりしよう. I hope friendship of him and me will last as long as ever. も I hope our friendship will last for ever. と簡潔にまとめられる.

ところで, 出だしが My hobbies are making cakes. の様に複数で始めると, 読み手は趣味がいくつか述べられるものと期待する. 従って複数で始める以上は, 一つだけでなく, いくつか列挙する必要がある. 日本語では複数を余り強く意識しないので, 既にみてきた様に, 名詞の場合も複数語尾を落しがちである. しかし英語の場合, 主語として使う時には, 対応する動詞も現在形では語尾が変化するし, 特に be 動詞の場合は, 形が全く変わってくる. 冠詞の有無にもかかわってくるし, 受ける代名詞も違ってくる. 又, 中には複数形をとらない名詞もある. それ故, 単数, 複数形の別は, きちんと認識して使う事が必要である.

又, 日本語の語感とは違う為, 日本語では似通った表現が使われているのに, 英語では, 全く違う語句で表現しなければならない場合がある. 自動詞と他動詞の区別も, その一つであろう. I think I happen traffic accident. が, 「事故をおこすのではないかと思う」という意味で書かれている事は, 日本人同士ならば容易に推測がつく. ところが happen は「起こる」という意味の自動詞であり, 「引きおこす」という意味の他動詞としては使わない. それ故この構文では, 自動詞 happen にかえて, 他動詞 cause 又は bring about を使う必要がある. 更に I think を, 「心配している」というニュアンスの I am afraid にかえて, I'm afraid I may cause a traffic accident. とすると, いわんとする所が表現できるであろう.

ところで日本人は, 断定的にものをいう事を嫌い, 不必要に I think を多用する傾向があるといわれている. 上の例でみた様に, 日本語では同じ「思う」という表現を使っているが, 英語では, そうあってほしい望ましい状況なのか, そうあってほしくない憂うべき状況なのかによって, 動詞を変えて表現する. 時には削除してしまった方がいい場合もある. I think I study hard English. 等は, むしろ I think を削除して, 単に意志未来の助動詞 will を挿入するか, 又は be going to を使って, I'll study English hard. 又は I'm going to study English hard. で充分表現できよう. 尚原文で, 目的語の前におかれていた副詞 hard は, 目的語 English の後にもっていかねばならないが, これは, 日本語の「一生懸命勉強する」という表現を一塊にして, そのまま英語に置き換えた為に生じた誤りであろう. 語句単位の逐語訳の影響と思われる.

更に単語単位の逐語訳の影響と推測されるものに, I telephoning like everyday. の like の使い方があげられよう. これを書いた学生は, 「毎日の様に電話している」という意味で書いていて, 辞書をひくと確かに like には, 「~のように」という意味がある. しかしこの文の「毎日の様に」というのは, 「ほとんど毎日」という意味で使われているので, almost を使って, I make a telephone call almost everyday. とすれば, 文意がきちんと表現できよう. 作文を書く時に和英辞典の使用を許可すると, 単語単位のまま英語に置き換えていく学生が多い. わからない単語を和英辞典であたる事はかまわないが, その後必ず英和, できれば英々辞典で用法を調べてから使わないと, 自分のものでない不自然な表現があちこちにとび散った英文ができあがってしまう. それどころか, 意図する所と違った意味になって, 文全体として意味が通じない場合も出てくる. むしろ辞書は使わずに, 既に知っている単語や語句を駆使して書いた方が, 借り物の表現がへり, 自然に近い

英文になり易い。

しかし一方、思い込みやうろ覚えのまま、用法を確かめずに語句を使った為に生じたと思われる誤りもある。よく出てくる want の使い方にしても、want to という形で使われる事が多いので、この学生も I want to a part time job. と書いたものと推測されるが、want to とつなげて使う場合は、to の後に動詞が必要である。従ってこの文でも、to の後に動詞 find を補うか、あるいは to を削除して、a part-time job を want の直接目的語として使えば、正しい使い方になる。一方、Because when I like so, I can drive a car. の when I like so は、「そうしたい時」の意味で使われているが、これでは日本語にひきずられた逐語訳なので、when I want to とし、主文の後にもっていく。この場合、表面的には to で切れているが、実際はこの後に drive a car が省略されている。次の例等も思い込みによる誤りと推測される。I cannot help finding an opening for me. は、文脈からして「就職口をみつけなければならない」という意味なので、I have to find を使うべきであるが、日本語の語感が似ている為、うろ覚えの cannot help ~ing を誤用したものであろう。I wish I found employment the company as soon as possible. も、「できるだけ早く就職口を見つきたい」という意図である事は明白なので、I want to find にすべきで、このままでは見つけられる可能性がない事になってしまう。仮定法の使い方を熟知せぬまま、使ってしまった例であろう。この様に、やさしい、よく知っていると思っている語句や表現程、逆に丁寧に辞書にあたり、用法を確認する必要がある。

更に日本語の表現では、量と数の区別なく、「沢山」という言い方をするが、英語では、much と many と区別して使う。それ故、I want to need many money for them. とはいわない。この文は、音楽鑑賞が趣味だという叙述に続いて書かれたものだが、自己修正の時に、I want to need の論理的矛盾に自ら気づき、I need に

訂正している。しかし many money for them はそのままであった。尚、代名詞 them も、何を受けて使っているのか、対応をきちんと確認してから使う必要がある。全く同じ表現でなくても、日本語では似通った表現が使われている為にひきおこされる混同の例として、自動詞と他動詞をみてきたが、動作と状態も又、その一例である。I go to bed till nine o'clock, I am happy. をみてみると、till という継続を表わす前置詞が使われているので、「寝る」という動作を表わす go to bed と一緒に使うと、論理的に矛盾が生じる。by ならば go to bed と一緒に使う事ができるが、文意が違って来る。日本語でも「寝る」と「眠る」と二通りあるが、ここでは「眠る」という意味の動詞 sleep 又は動詞句 be in bed に、助動詞 can をそえ、文頭に理由を表わす接続詞 since 又は as をもって来てはじめて、「9時迄眠っていられるので、嬉しい」という文意が伝わる。この様に語句の選択一つとっても、論理的に矛盾がないかどうか、文意をきちんと伝えているかどうか、吟味して、慎重に選ばなければならない事がわかる。

時制を内容にてらして、きっちり把握して使う事も、英語らしい英文を書く上で大切である。特に現在完了形は、日本語的発想からは遠いせいか、書く場合、自ら積極的に取り入れる事が少ない。例えば、「余りいろいろな所には行っていません」という意味で学生が書いた英文は、I don't go so many place. となっていて、現在形を使っている。しかしこの場合は、be 動詞を完了形に使う経験を表わす表現 I haven't been to so many places. とすると、文意がよく伝わる。その他、現在進行形と現在形も、日本語の語感との関係で、混同しやすい。「~している」というと、すぐ現在進行形を使う学生が多いが、現在形でいい場合がかなりある。前出の誤用例 many kinds of music is listening. も、日本語では「聴いている」と表現するが、「今聴いている最中である」という意味ではないので、英文では現在形を用いる。

又, I'm working at Dunkin Donuts. も, 「ダンキンドーナツの店でアルバイトをしている」という意味なので, 進行形ではなく, 現在形 I work を用いる. この様に, 日本語の語感から感覚的に逐語訳すると, 英文では文意が正しく表わせなくなる事がある. I wanted to stay longer, not only one night. のつもりで書いたと思われる I want to stayed long time not only one night. 等は, 語法の上でも誤文であるのは勿論であるが, いかにも日本語的発想と語感で書いた事が感じられる文である.

日本語的発想の影響と思われるもう一つの点は, 具体性のない一般論的な曖昧な表現がかなりみられる事である. 例えば, 「会社訪問をしたい」と書いた後で, I must prepare to do about it. とあるが, 英文では, 具体的にどういふ準備をするのかを述べた方がいい. このままでは曖昧すぎて, この文を書いた事の意味が余りない. 又, I sometimes went to the part time job. と書いた後で, 具体的に I worked in ... と続けている学生がいるが, 最初の文を独立にたてる意味は余りなく, 始めから I worked part-time at ... と二番目の文に組みこんでしまえば, 簡潔で, かつ具体的な表現ができよう. 同じ様に I have some hobbies ... という表現も, 余り意味のない文で, むしろどんな趣味なのか, 具体的に述べた方がいい. My impression was an average story. の場合は, 日本語の「私の印象は～でした」という表現にひきずられ, そのまま my impression を主語にたててしまったものと思われるが, 主語と動詞の対応関係に矛盾がある. 構文としてはむしろ, I found it ... とした方が自然であろう. 更に an average story 等という, 一般的, 抽象的な表現ではなく, より具体的に印象を述べる事が望ましい. I want to spend this vacation to some purpose. 等も, 具体的な目的を述べない限り, ほとんど意味のない文である. 英文を書く場合, 特に論理的に矛盾のない, 具体性のある展開が求められている事を銘記すべきであろう.

III. まとめ——読解力との関係

書き言葉は, 話し言葉と違って, 狭義の「言語」以外の手掛りが使えないので, 言葉のきまりである文法を無視し, 日本語的な発想で, 唯感覚的に内容語を並べただけでは, 書き手の意図を読み手にきちんと理解してもらう事は難しい. 言葉を学ぶ事は, その背景にある文化を知る事であるといわれるが, 英語と日本語では, 構文のみならず, 発想方法, 語感にも違いがある. だからこそ逆に, 言葉の学習を通して, 別の考え方, 発想にふれる事ができるわけでもある.

英語の読み書きにおいては, 論理的に関係をおさえる事が基本であり, 特に日本語では省略される事の多い主語と, それに対応する動詞の関係を確認する事が, 不可欠である. 日本語の場合は, 主語というとまず人間を想定するが, 英語の場合には, 無生物や抽象名詞, 更には仮主語や天候, 気候, 時間, 距離, 状況を表わす it と, 主語にたてるものの選択の範囲が広い. 従って日本文と英文では, 必ずしも主語が対応しているとは限らない. それ故, 日本語的な発想, 語感で主語をたてると, 論理的に矛盾が生じる場合が多い事を見てきた. 語句の選択にしても, 時には省略や補足が必要で, 単語単位, 語句単位の逐語訳的転換による矛盾の例も, 数多くみてきた.

こういった矛盾に自ら気づく為には, 論理的な思考力が必要である. その意味で, 推敲の機会を提供する自己修正の段階は, まさに論理的な思考過程であり, 単なる綴字や文法上の訂正にとどまらず, どの程度構成や内容に迄ふみこんだ訂正ができるかという事が, 作文力向上の重要な指標になるものと考えられる.

話し言葉の場合, 浴びる様に聞く事を通して, 自然の会話の中で自己修正がなされる様に, 書き言葉の場合も, 自己修正上達の為には, よく読みこむ事が必要である. 多読して初めて語感も養われ, 英語的な発想にも親しむ事

ができる。特に、視覚的刺戟による読み書きの相互作用は、知識の確認、定着に役立つ。文法も単なる規則として覚えるのではなく、沢山読む事を通して自ら納得して初めて、自分のものとして、書く時にも使える様になる。多読せずして、いい英文を書く事は望めないといっても過言ではないであろう。外国語学習と年令との関係を調べた報告をみても⁽¹¹⁾、年令が進んでいる場合、読み書きを無視する事は得策とは思われぬ。書くという、より積極的な作業で芽ばえた問題意識をもって読みこむ事を通して、知識を確かなものにし、英語的発想の表現をも、身につける事ができるのではないかと考える。

注

- (1) Peter Ladefoged, *A Course in Phonetics*, Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1982, p.109.
- (2) "How to Read Body Language" *Developing Reading Skills, Advanced* by Louise Hirasawa & Linda Markstein, Newbury House Publishers, Inc., 1978, p.103, 1.33-p.104, 1.1.
- (3) *The Acquisition of Written Language, Response and Revision* edit. by Sarah Warshauer Freedman, Ablex Publishing Corporation, 1985.
- (4) 付岡京子, 「パラグラフの概念形成について」, 『共栄学園短期大学研究紀要』第4号, 1988.
- (5) Charles Kaplan, *Guided Composition*, Holt Rinehart & Winston, Inc., 1968, pp. 57-64.
- (6) Linda Flower, *Problem Solving Strategies for Writing*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1981, p. vi.
尚, 括弧内は筆者が書き入れたものである。
- (7) William Strunk, Jr., *The Element of Style*, Macmillan Publishing Co., Inc., 1979. p. 18.
- (8) 文化庁「ことば」シリーズ11, 『言葉に関する問答集5』文章の整え方, 大蔵省印刷局, 1979, p. 83.
- (9) 文化庁, op. cit., pp. 83-84.
- (10) Strunk, op. cit., p. 32.

- (11) *Child-Adult Differences in Second Language Acquisition*, edit. by Stephen D. Krashen, Robin C. Scarcella & Michael H. Long, Newbury House Publishers, Inc., 1982.